私の知らない「私」

●今年の抱負は?

年頭にあたると、私たちは、日頃の生活でゆっくりと心を向けることもなかった、「抱負」を考えようとすることがあります。そして、いろいろと想いを巡らせてみては、こういう「抱負」はどうだろうか、ああいう「抱負」はどうだろうかとしばらく考えます。

これをお読みのあなたは、年頭にあたり、「抱負」を胸に抱きましたか? もし、お考えになったならば、どんな「抱負」だったでしょう。

たしかに、年頭の「抱負」は、三日坊主で終わりがちなものの代表ですが、それでも普段の自分では、考えてみなかった崇高なあり方を求める生き方や、あるいは、多くのいのちと繋(つな)がっていることを改めて受けとめ直す、深い生き方を大切にしようという気持ちが生まれてくることがあります。

さて、そうすると、自分にとって「抱負」とは一体何だろうと、自分の生き方そのものと向き合うことになります。「抱負」を考えようとする時の自分を考えてみると、今の自分の生き方を、「まだまだ本来のあり方ではない」と見つめ直しているように思います。そして、これから向かって行こうとする、「あるべき理想の自分のあり方」と向き合うことでもあるように思いました。

●“それ”の声が聞こえる

文化庁長官も務められた臨床心理学者・河合隼雄さんの『こころの読書教室』(2014年、新潮文庫)という本を読みました。この本は、河合さんが読んだ本を解説して、人間のこころについて説き明かしていくという形式をとっています。テーマは、「私と“それ”」です。“それ”とは何かというと、「こころが“それ”という謎として現れてきて、その深みに入っていき、そこで異性像としてのこころに出会い、自分を超えるものとして自覚されるという構造を取っている」と、ご子息の河合俊雄さんが同書の「まえがき」で解説をしています。

河合さん親子は、ユング心理学の研究者です。

ユング心理学は、「人間の心の働きは意識のコントロールや認識を超えた『無意識』の働きが大きな位置を占める」という考え方に基づく心理学で、自分自身との「対話」、患者との「対話」を重要視しています。

この本を読んでいると、人間のこころを深く見つめつつ、それを見つめていくところに、今まで思いもよらない生き方が、それぞれのいのちに開かれてくることを教えてくれているようです。

“それ”を考えていたら、「ジョハリの窓」という心理学の学説を思い出しました。1955年、サンフランシスコで発表されたその説によれば、私たちの心には、「四つの窓」、つまり、「四つの自分」があるというのです。

まずは、「自分と他人が共に知っている自分」、その説では「公開された自己」(open-self、開放の窓)があるといいます。

それだけでなく、「自分だけが知っている自分」 があることを私たちはよく知っています。つまり、「隠された自己」(hidden-self、秘密の窓)だというわけです。

さらに、「他人だけが知っている自分」もあります。「自分は気がついていないものの、他人からは見られている自己」(blind-self、盲点の窓)です。「無くて七癖」などというように、自分では気づかないけれど、他人の方がよく知っている自分の姿のことです。

ところが、よく見つめてみると、「他人も知らないけれど、自分も知らない自分」が、自分の中に、あるのではないでしょうか。それは、「誰からもまだ知られていない自己」(unknown-self、未知の窓)があると考えられると指摘されています。

“それ”は、もしかしたら、大変おそろしい自分中心の自分であり、誰にも知られたくない自分なのかもしれません。また、“それ”に基づいた行いは、自分の棺桶の蓋が閉じられるまで、誰にも話すことのできないものになるかもしれません。

しかし、“それ”は、時によっては、自分の都合を超えた、温かさや慈しみをもった自分であるかもしれません。「未知の窓」を知ることが心が育てられることかと思いました。

●成っていない私が、あるべき理想の私に成っていく道

釈尊の教えは、「生まれながらの自己中心的な人格」、つまり成っていない私が、「教えに育てられた道理に叶う人格」、つまり、理想の私に成っていくことです。それを、さとる、信心を獲得する、往生するなどと表現して、それぞれの仏教は深めています。

こんな話を故・信楽峻麿(しがらきたかまろ)先生からお聞きしました。

> とても深く念仏をよろこんでいた或るお爺さんがいました。村の人びとから大変尊敬されていましたが、村の若者が、このお爺さんを試してみようと悪巧みを立て、ある夜、提灯を灯し、お念仏を申しながら、夜道を歩くお爺さんを待ち伏せて、田んぼに突き落としました。田んぼの中から泥まみれになって這い出たこのお爺さんは、何かブツブツ言いながら、又夜道を歩いて行きました。
>
> その独り言とは、「コラエチャレエヨ、コラエチャレエヨ」というように聞こえてきました。若者たちは、日頃、信心深いとわれるお爺さんがどのように腹を立てるか試してみようと思っていたのですが、その独り言の意味がさっぱり分かりませんでした。
>
> それから何年も経った後のこと、若者の一人が、この念仏爺さんに、かつての悪戯は自分たちがやったことだと告白して詫びながら、あの時の独り言は一体どういう意味なのかと尋ねました。するとお爺さんは、
>
> 「日頃、念仏爺と呼ばれるわしだって、あの時はずいぶんと腹が立ったものよ。だがなあ、如来さんのことを思ったら、どうせ村の若者の悪戯じゃろうから、腹を立てるな、こらえてやれよ、コラエチャレエヨ、といわれているように思われたのよ。だからあんな、独り言をいったのだ」
>
> と語ったそうです。

普通ならば、誰でも腹が立った時には、カッとなって、自分自身の心や姿がまるで見えてきません。腹を立てているということにすら自覚を持っていません。腹を立てている自分だけがいて、その自分の心や姿を振り返る心も眼も存在しません。

しかし、この爺さんは、一方で煩悩を抱える生まれながらの自分が腹を立てながらも、もう一方で、念仏を申すことによって育てられたもう一人の自分が、その瞬間に、腹を立てている自分自身を見つめているのです。それはまさしく念仏を通して身に得た手鏡であり、また如来の眼です。そして、このお爺さんは何より、「こらえちゃれえよ」とよびかける如来の声を聞いているのです。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

「奪い合う私」と、「共に成っていく私」

●名のるということ

2014年、映画監督の宮崎駿さんがアメリカのアカデミー名誉賞を受賞しました。長年、アニメーション映画を作り続け、大きな業績を積み上げてきたことによります。

宮崎監督の映画は、興行として成り立つような子ども向け作品という側面をもちながら、どの作品も、それと向き合う一人ひとりが自分の人生や、今の社会やその歴史を重ね合わせて深読みをしたくなるようなところがたくさんあると、私は受け止めています。

その作品の一つに、『千と千尋の神隠し』という大変興味深い作品があります。核家族の家庭の小学生の少女が、不思議の世界に一晩だけ迷いこんでしまうお話です。

その世界では、人間が家畜として飼われ、代わりにさまざまな動物や化け物が、油屋という高層の木造日本建築の銭湯で働いています。そこには八百万(やおよろず)の神々が各地から疲れを癒しに集まります。またそこは、お金を使えば欲望のままに、風呂に浸かり、ご馳走を食べて、おもしろおかしく過ごせる饗宴の場として描かれます。

ヒロインの荻野千尋は、その油屋の隣の飼育場で、食用の豚として飼われている両親を救い出すために、その銭湯で女中として働く決心をします。しかし契約の時に、彼女は、経営者の湯婆婆(ゆばーば)から、名前をとられてしまい、ただの「千」と呼ばれます。

「自分の名前を忘れてしまうと帰れなくなる」と教えてくれたのは、同じように、もとの名前を奪われ、「ハク」と呼ばれて、この油屋に見張り役として働く青年です。千はハクから、以前二人は会ったことがあるといわれ、彼にとても強い関心を持ちます。その油屋では、千とハクだけが、動物でも化け物や神でもないのです。

名前を奪うということは、その人のそれまでの社会的な生き方を葬ることになり、奪った人によって支配されることにもつながります。

それを見ながら、日中戦争時代の1939年、大日本帝国朝鮮総督府が、制令によって現地の人のハングル名から、日本の姓に変え、名を改める、「創氏改名」という政策を作ったことや、刑務所では名前でなく番号で呼ばれ管理されることなどを思い出しました。

ところが、ある法座に来ていた坊守さんから、油屋とは湯屋、今風にいえば風俗店のお風呂で、そこに働く女性はお店用の名前、源氏名を名のることを意味していますよ、と教えていただきました。同じ画面から色々な受けとめが生まれるのですね。

●私の根拠〜アイデンティティ

「顔無し」という、自分の名前どころか、顔というアイデンティティそのものを持っていない人物が、油屋にやって来て、架空の金を出しては蕩尽(とうじん)します。本当に、湯水のように金を使うのです。すると、大勢の使用人たちが彼の周りに集まり、ちやほやと持ち上げます。つまり、相手をしてくれ、存在を認めてくれるのです。

「顔無し」は、それまで、一人っきりで、ポツネンと過ごしていた時に、千は声をかけてやったことがあり、油屋に上がることができました。ところが、金を使い始めるとまるで人格が変わったように横暴になります。そして、自分を認めないものは、食べてしまい、その存在を無くしてしまうのです。金という原理で人の存在を左右するのです。

女中の千に向かっても、金を差し出し、これを受け取り自分の相手をしろと迫ります。しかし、千はその時、湯婆婆から迫害を受けるハクを助けようとしていたので、「いらない」と断ります。さらに、「千は何が欲しいんだ」との質問に、「私の欲しいものはあなたに絶対出せない」とキッパリ言います。

「私の欲しいもの」とは何でしょう。なぜ、「顔無し」にはそれを出せないのでしょう。映画を見ている私に突きつけられる言葉であり、問われている生き方です。

●非僧非俗の名告り

高度経済成長で、日本の風景は色々なところで変わりました。それは、何かを奪い壊すことでもありました。実は千尋は子どもの頃、コハク川という名前の川で、おぼれそうになった時、その川の流れによって浅瀬に救われたのでした。しかし、マンション開発で川はなくなり、川の名前は呼ばれることもなくなります。つまり、土木事業による経済発展を価値あることだという生き方を選んだ世界では、その川は存在したことも忘れ去られていくことになります。実は、ハクは、かつてこの川の主だったのです。

名前を奪われると人はそれまでの生き方を奪われるということを、私は親鸞聖人から教えられました。親鸞聖人は、三十五歳の時(1207)、権力の横暴によって念仏弾圧に遭い、僧籍(法名、仏法の名前)を剥奪され、俗名を押しつけられました。そのことを親鸞聖人は主著に、「非僧非俗(僧にあらず、俗にあらず)、このゆえに禿の字をもって姓とす」と明かします。これは表面的には、いま自分は公において認められた僧ではない、しかし、俗人として生きるつもりもない、という心の姿勢を表わしたものです。

しかし、非僧の僧とは、たんに出家した人というだけでなく、もっと深いことをあらわして、真実、真ということを意味していると思います。つまり、この現実の私のありようを見つめると、つねに真実、如来さまに背いて生きていることを、厳しく省みて、深く慚愧していることをあらわしています。

また、非俗とは、だからといって、私はこの世俗の権威や損得の価値の中にどっぷりと埋没し、それを追いかけて生きることはできないということです。つまり、世間のことを、相対的で虚仮な世界だと見届ける、俗に対する厳しい拒否の姿勢を示しています。

すると非僧とは、すでに阿弥陀仏の本願の真実に出遇い、信心に目覚めて、「ただ念仏のみぞまこと」『歎異抄』という道を生きながら、なおも自分は真実なるあり方に背いて生きているという悲しさであり、世俗に埋没してしか生きられないことに対する厳しい痛み、悲しみを背負っていることを表しています。

しかも同時に非俗とは、その世俗の権力や財力などの色いろな価値の誘惑と闘い、それを超えていこうとする、真実を求める熱い願いに生きている姿を表わしています。

『涅槃経』によると、衣食をうるために、頭を剃って形だけの僧侶になったもの、または破戒して法を護らない僧侶を、禿人とか禿居士といいます。親鸞聖人は、非僧非俗のご自分の生き方を省みて、禿という姓を名のっているのです。

本当の名前を取り返すとは、私が本当の私に成っていく生き方でもあるのですね。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

去年今年貫く棒の如きもの
～「末法思想」という歴史観

●夢（ゆめ）か、現（うつつ）か

2014年の大晦日、NHK紅白歌合戦を見ていると、突然、横浜アリーナからの特別ゲストの中継がはじまりました。これは、司会者にも事前予告がなかったといいます。

いったい誰が出るのだろうと、画面に映ってきたのは、チョビ髭（ひげ）の男、いや、サザンオールスターズの桑田佳祐さんが黒い付け髭で登場しました。31年ぶりの出場という「歴史的瞬間を皆さんに見ていただきたいと思います」という紹介にのって、「ピースとハイライト」を歌い始めました。まるで夢のような出来事です。

歌詞は、「何気なく観たニュースで　お隣の人が怒ってた」という言葉で始まり、海を越えた隣国を想像させました。すると、「教科書は現代史を　やる前に時間切れ　そこが一番知りたいのに」、さらに、「歴史を照らし合わせて　助け合えたらいいじゃない　硬い拳を振り上げても　心開かない　都合のいい大義名分（かいしゃく）で　争いを仕掛けて　裸の王様が牛耳る世は……狂気（Insane）20世紀で懲りたはずでしょう?」などと、現代日本の状況を暗示する歌詞が続きます。

ところが、桑田さんは、歌詞をそのまま読まず、カッコの中の読み方で歌っています。これは、2013年8月に発表された曲ですが、2014年7月1日に、他国への攻撃に自衛隊が反撃する集団的自衛権の行使を認めるために、憲法解釈を変える閣議決定が行われたことと奇しくも重なっているように思えました。

インターネットで調べて見ると、この曲の公式プロモーションビデオには、ヒトラー総統は出ませんが、中国の習近平主席とアメリカのオバマ大統領、韓国の朴槿恵大統領と日本の安部首相のお面をかぶった人たちが、お互いに小突き合っています。また、紅白のテレビ画面には、演奏に合わせてスクリーンに世界の紛争映像が映しだされました。

実は、その直前、28日に、安倍首相夫妻は、サザンのライブを鑑賞したことが報道され、桑田さんが「衆院解散なんてむちゃを言う」と歌詞を変えて歌ったことが話題になっていました。この報道を知っていたのに、チョビ髭姿を見ても、すぐにはピンと来なかった自分に不甲斐なさを感じましたが、歌は常に歴史認識を持っているからこそ、流行ることも、話題になることも、そして人びとに共感されることもあるのだということを、あとになって、こうして原稿を書きながら確認しています。そして、「政府が『右』ということを『左』というわけにはいかない」と言う会長のいる放送局の人びとが、大晦日に放った快挙だったということが、じんわり伝わってきました。夢ではなく、現実に放送されたのです。

●歴史を知ること

明けて2015年の元日、明仁今上天皇が、宮内庁を通じ文書で年頭の所感を公表しました。その中で、「本年は終戦から70年という節目の年に当たります。多くの人々が亡くなった戦争でした。各戦場で亡くなった人々、広島、長崎の原爆、東京を始めとする各都市の爆撃などにより亡くなった人々の数は誠に多いものでした。この機会に、満州事変に始まるこの戦争の歴史を十分に学び、今後の日本のあり方を考えていくことが、今、極めて大切なことだと思っています。」と明かされています。

「歴史を照らし合わせて　助け合えたらいい」という歌詞と、「満州事変に始まるこの戦争の歴史を十分に学び、今後の日本のあり方を考えていくことが、今、極めて大切」という言葉が、奇しくも、重なり合うものとなりました。年を越えて貫く棒のように、二人は歴史を学ぶことの大切さを強調しています。

そういえば今上天皇は、2001年12月18日、宮内庁における記者会見で、「私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると、続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています。」と、皇室の歴史が、朝鮮半島との姻戚関係にあることを自ら発言して、大変、衆目を浴びたことがありました。

「戦争をしない国」から、「戦争のできる国」へと、民意ではなく、閣議決定で方向性を変えようとしているこの国で、二人のメッセージは、とても印象的でした。

●末法思想という歴史認識

仏教は、身体が育つように、身体を通して、心も育つと考えます。身体が育てば、小川や溝や、土手などの障害物を越えていけます。心が育てば、同じように様々な、人生の障害、苦しみ悲しみ悩みを超えていけると教えます。

心が育つ経験を、「さとり」といい、また、「信心」といいます。新しい心や苦悩を超える人生態度が育ったことを浄土教では、往き生きると書いて往生といい、人生最大の課題である「死」をも超える新しい生き方、救い（利益）を得るといいます。

ところが現代社会は、心を育てることに関心が向きにくいようです。仏教にも大変、造詣の深い社会心理学者のエーリッヒ・フロムさんは、『生きるということ』（1977年、紀伊國屋書店）という書で、「持つことか、成ることか」と、物質的経済的に何かを持つこと（所有）で生まれる対立・争いや束縛・支配の人間関係を超えて、心が成ること（成長）で、人生をまっとうすることを仏教は教えていると示します。つまり、自分の成長を考えることなく、何かを所有する傾向は、他の人が所有することよりも、奪い取ること、具体的にはお金や地位などを手に入れることに関心が向けられる社会になりつつあるように思えます。

かつて、「物で栄えて、心で滅びる」といわれましたが、報道によれば、衆院選挙で有権者の関心の第一は、「経済政策」であり、「憲法改正」「集団的自衛権」「秘密保護法」などへの関心は非常に低いといわれます。つまり、自分が所有することに関心が向けられ、生きることの意味を考えたり、社会の文化のあり方に対する関心が育っていない傾向が強くなっているようです。このように、物を持つことに関心が向けられる現代社会は、仏教の本質的な教えを求めにくい時代状況になっているのかもしれません。

仏教はすでにこの問題を、末法思想という歴史観から説き明かしてきました。つまり、時代が過ぎれば、諸行無常の教えの通り、お釈迦様の教えの影響力が衰退して、人間は、奪い合い、争い合う生き方になるという歴史認識を教えています。だからこそ、私たちの先輩がたは、日々の生活で、ことあるごとに、季節ごとに、仏法を大切にして、その教えを受けとめ、次の時代に伝えようとし、何よりも自分自身の生き方が、自分の心がどうなっているのかを問い直し問い直してくださったのだと思います。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

優しさの連鎖
～菩薩を生きる

●「情けは人のためならず」

失意のどん底に在る人に同情の手を差し寄せるのはもちろん純粋な動機に基づく事で他意は無いが、やがて、自分が逆境に立ったときには、相手から救いの手を差しのべられることにもなるものだ。（『新明解国語辞典第五版』三省堂より）

この諺（ことわざ）は、誤って用いられることが多く、「情けをかける事は本人自立の為に良い結果をもたらさないものだ」（前掲書）と解釈する人が多いといいます。

2012年3月の文化庁の月報に掲載された「国語に関する世論調査」によれば、本来の意味を選んだ人と、「本来の意味ではない『人に情けを掛けてやることは、結局はその人ためにならない』を選んだ人との比率は、ほぼ同じという結果」だとありました。さらに同調査で、「年代別のグラフを見ると、60歳以上を除く全ての年代で、本来の意味ではない」意味を選んだ人が多いと指摘しています。

ところで、大阪大学のウェブサイトによると、同大学大学院人間科学研究科の研究チームは、5～6歳の幼児の日常生活においても、人に親切にしている子どもは、その後、その親切な行為を見ていた他の子どもから親切に関わってもらうことが多くなることを確認したといいます。このチームによると、これは「社会間接互恵性」というそうですが、「情けは人のためならず」が幼児の人間関係にもあるということです。

他者に対して、親切で優しい行動をするのを見ると、人はその親切な行動をしている人に対して、優しく接しようと思うのでしょう。その報告の中にも指摘されていましたが、人間は、普段の生活で困っている人を見ると、知らない人でも助けたいという衝動にかられたり、親切を行う性質を持っているそうです。そして、動物の中でも、こうした利他の精神は、人間の独自なものだそうです。

すると、私たちの先天的生得的な一面にこうした利他の傾向があるのでしょう。しかも、先の研究にあるように、そうした利他の行動を目の当たりに見ることで触発されて、具体的な行動となるということは、後天的学習的な側面が大事な要因だといえると思います。

●人とのつながり

日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET、以下、ジムネット）は、1991年の湾岸戦争の影響によって、ガンや白血病の子どもたちが増えているイラクの人びとが、医療を受けられ、命が助かることなどを目指して医療支援をしているNGOで、2004年に設立され、鎌田實医師が代表を務めています。私が関わるアーユス仏教国際協力ネットワークとのつながりも深く、2005年に事務局長の佐藤真紀さんと出遇いました。2007年には現地スタッフでイラクの病院内学校の先生も務めるイラク人のイブラヒムさんが、来日中に私の寺を訪ねてくれ、本堂に集まった人びとの前で、戦争で、傷つき、悲しみ、苦しんでいる人びとの話をしてくれました。

ジムネット:http://blog.livedoor.jp/jim_net/archives/50960407.html

そして、2015年2月4日、参議院議員会館緊急集会「私たちは人質問題をどう考えるか」での佐藤事務局長の発言で、ジャーナリストの後藤健二さんとジムネットとの接点を知りました。

彼の発言を要約すると、「ジャーナリストが最前線での状況を伝えてくれ、それでNGOが支援に繋げていくという協力関係が出来ている。2004年、イラクでの活動が危険になり、ヨルダンでの支援活動が始まった時、後藤さんが取材をしてくれた。たまたま、その時期、妊娠している妻が白血病で、抗がん剤治療か、お腹の子を育てるかという厳しい選択を迫られていたのが夫のイブラヒムだった。ヨルダンの緊急がんセンターへの受け容れ、俳優ポール・ニューマンの支援救急車で入院、未熟児の双子が帝王切開で誕生、そのまま入院し抗がん剤治療。ちょうど、バグダッドから戻った後藤さんに彼らの面倒を頼んで事務局長は帰国。年明けてイブラヒムの妻は亡くなるが、最期の様子を後藤さんはカメラを回し続けた。家族も居ず誰も手伝ってくれる人のないヨルダンで妻の葬式。後藤さんが棺を担いで車に乗せ、イブラヒムがイラクに帰るのも助け、経済的な支援もしてくれた。イブラヒムにとって後藤さんの存在は大きく、精神的にも支えになってくれた。戦争は、人が殺し合い、家族の憎しみは残り、新たな戦争を生み、テロの動機になるのかもしれないが、後藤さんやヨルダンの人たちの優しさに触れ、イブラヒムはイラクに戻って自分も人道支援の仕事をすると言ってジムネットの現地スタッフとして活動をしてくれるようになった。人の温かさ、親切はぐるぐると巡っていく。戦争に打ち勝つためにはそういう連鎖を続けていくしかない」と語りました。

●自利利他の菩薩の願い

仏教が展開して、大乗仏教という運動の中で、菩薩という生き方が尊ばれます。菩薩とは、仏の教えに出遇い、自らも真理・真実を求め、自利と利他に生きようと願う者をいいます。自利利他とは、自分の利、「さとり」を目指すこと、他者の利、すなわち、人びとの救いを目指すことです。こうした自利と利他を求める菩薩たちの共通の願いを、のちに「四弘誓願（しぐせいがん）」と表すようになります。

「衆生無辺誓願度（しゅじょうむへんせいがんど）　煩悩無数誓願断（ぼんのうむしゅせいがんだん）　法門無尽誓願学（もうもんむじんせいがんがく）　仏道無上誓願成（ぶつどうむじょうせいがんじょう）」（苦しみ悩む人は多いけれど最後の一人まで救おう、私の抱える自己中心性は限りないけれど最後の一つまで無くしていこう、学ぶべき理想の教えは泉のように湧いてくるけれど残らず学んでいこう、崇高な生き方はこの上ないけれど必ず完成を目指していこう、試訳）

菩薩の一人、阿弥陀仏の前身である法藏菩薩は、その四十八にわたる願いで繰り返して、「若不生者（にゃくふじょうじゃ）、不取正覚（ふしゅしょうがく）」（もし、悩み苦しむ人びとが、新しい救われた生き方を完成できないならば、私は正しい「さとり」を開いたことにはなりません）と『無量寿経』の本願で表明します。つまり、あなたが救われなければ、私も救われないという生き方です。

これは、「社会間接互恵性」のように、「私も、人びとを救う菩薩として生きよう」という、次の菩薩を生み出します。後藤さんも、イブラヒムさんも、そしてそれに関わるあなたも、あなたも菩薩と成っていく無限に続く運動体を自利利他の精神が生み出すのです。この精神から生み出されるのは、もちろん「武力で平和は作れない」、「報復の連鎖はやめて」いこうという生き方になります。そして、「テロとの戦い」を声高に叫び、自衛隊を派遣してでも、戦闘行為で問題解決しようという主張とは正反対のものが菩薩の生き方です。

合掌
万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

仏教の学び方
～角度を間違えるな

●聞法の角度

私の記憶のなかにあることですが、仏教を学ぶということは、二つの異なる角度が大切だ、ということを、かつて故・菅沼晃教授（東洋大学元学長・同大学名誉教授、1934～2016）から教えてもらいました。

その一つは、仏教を学ぶとき、例えば、「この経典は、紀元後1世紀の頃、西北インドの地方で編集され、当時の仏塔崇拝をもとにした在家主義的な傾向を重視した内容で、書かれた言語は、ブッディスト・ハイブリッド・サンスクリット（仏教混交梵語）で、数種類の漢訳経典に残されている」などと客観的に、対象的に学ぶ態度です。

もう一つは、仏教を学ぶとき、「これはおさとりを開かれた仏さまのおこころ、そのお智慧とお慈悲からあふれ出た言葉であり、真実に背き、自我の都合に凝り固まり、苦しみ悩みを深めている、この私を目覚めさせ、お育てくださる真理・真実が説かれている」と主体的に自覚的に学ぶ態度です。

当時、教授は、あなたたち、学生諸君のなかには、パーリ語やチベット語に対して興味を持ち、文献学的な関心から仏教を学んでいく傾向の人びとがいるようだが、そういう諸君は心して、思想的宗教的な文化の側面を大切にしながら学ぶとよろしいだろう、と指摘をされました。そして、また一方、あなたたち、学生諸君のなかには、宗祖や宗派の教えや言葉に興味を持ち、宗教文化的な関心から仏教を学んでいく傾向の人びとがいるようだが、そういう諸君は心して、厳密な原典研究や文献学的な側面を大切にしながら学ぶとよろしいだろう、と指摘をされました。そして、そのような心がけを通して、深い学問研究は成り立っていくのだということをご自身の生きる姿勢や実感を通して語ってくださったことを思い出します。

これは、今も私に大きな課題として迫り、ご法話を聞くにあたっても、大切なことを示唆してくれます。ご法話では、仏教とは、まるで鏡のように自分の姿を映しだすものだといわれます。鏡の大きさや重さだけを客観的対象的に学ぶのではありません。鏡によって自分では見えていない姿が映されるように、自分では気づかない自己中心の愚かさや罪深さを抱えていることを主体的自覚的に気づかせるのが仏教だということになります。

ある先生が仏教婦人会で、「み仏の教えは鏡のように、人間の自己中心の愚かさや罪深さを教えてくれるものだ」というご法話をされ、講師控え室に戻った時のことでした。その仏教婦人会の会長さんが、先生にお礼の言葉を述べ、最後に自分の思いを語ったそうです。

「今日のご法話は、うちの身勝手なお嫁さんに聞かせてやりたいと思いました」

その先生は、間髪を入れずに、ご指摘になったそうです。

「今日は、あなたのお話をしたのですよ。あなたのことをお話したのですよ」

笑い話のようですが、本当にあった話だそうです。いまも、あちこちで同じようなやり取りがあるのかもしれません。み教えを聞法する角度にも、一つは客観的に知識として学んでいく側面、もう一つは主体的に自覚を通して学んでいく側面があるようです。

●二人のお念仏者

九州龍谷大学短期大学で教鞭をとられた貞包哲朗（さだかねてつろう）ご住職の『仏智に転じられて』（法藏館）という本に、こんなお話が紹介されていました。

あるお寺に、共に九〇歳を越えた二人のお念仏者がおられるそうです。どちらも、壮年時代は、壮健で大変な働き者でした。

ところが、一方の方は車いすの生活をされるようになり、介護施設に通っておられます。お見舞いにいくと必ず不安そうな顔で、

「こんな情けない身体になってしもうて……。もう私は死んだも同然でござんす……。早く、お迎えがこないもんかいな……」

と会うたびに涙を流し、愚痴をこぼされます。

もう一方の方も同じように歳をとられ、一人暮らしの生活をされています。特に数年前にお連れ合いを亡くされ、全く気力を無くし、睡眠薬を常用する生活でしたが、聞法を続けるうちに、ある時から立ち直りが見え始め、今やはり不自由な身の上ながらも、

「御院さん、おかげさまで、こんな思いもかけない歳まで生かして頂いております。お説教では、『一日一日を喜んで』と教えて頂きましたが、今の私には一時ひとときを有難うございますと過ごしております」

と柔らかい笑顔で申されるそうです。

二人とも朝夕お内仏にお参りされ、寺の法座によく聴聞されていた「お同行」です。ところが一人は過去にしがみつき今を悩み、一人は不自由なままに今を喜ぶ何かを身につけておられます。何が違うのでしょうか。

私は、私たち一人ひとりの教えを聞く角度が問われているのではないかと思いました。

●「おかげさま」論争

かつて、「おかげさま」という言葉は神道と仏教ではどちらが先かで論争したことがあったそうです。どちらの学者も古い文献を並べてお互いに譲らなかったそうですが、金子大栄（かねこだいえい）（1881～1976）師は、「神道が先だと言われるなら、認めていきましょうよ。仏教の思想をあらわす言葉をちゃんと神道が教えて下さったおかげでありがとうございます、とこう言えるのが、おかげさまという言葉を使っている証拠なのでありまして、どっちも譲ろうとせず、おかげさまはこっちが先でないと権威がないとするならば、このおかげさま論争ほど、人間の浅はかさをむき出しにしたものはありません」と言われました。

今日も国会をはじめ、いろいろな論争があります。相手を責める論法が、鏡を忘れたならば、それは大切なことを見失い、自己主張のみに終わるように感じられます。

たとえ仏教を聞いていても、自分を飾り、立派に見せ、武装し、そして相手を批判し、見下し、裁こうとしているならば、それは教えによって自分が知らされ育てられる姿ではなく、自分を正当化するために教えを道具や手段に利用しているのでしょう。

「おかげさま」「もったいない」「ありがたい」という言葉を聞いていながら知識だけになっていないか、角度を間違っていないか、永遠の課題にしたいと思います。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

「琴の糸とストレス」

●「キレる」お爺さん

先日、ある店で、連れ合いと昼食を食べていました。私たち以外は、あと2組のお客さんがいるだけの静かな時間を過ごしていました。

夫婦と思しき1組が先に帰ったあと、私（1957年生まれ）と同じ位の年代の息子さんと、そのお父様の親子連れが二つ仕切りの向こうの席にいるだけになりました。

突然、怒鳴り声が聞こえはじめました。妻も私も聞いて聞かないふりをしてましたが、かなり激昂しているのか、はっきりと聞こえてきます。

怒った理由は分かりません。もっとも、その人にとっても理由はもう既にどうでもよくて、怒るために怒り続けているような様子で、「自分は一流新聞社の会長を知っているから、この店のことを伝えるぞ」、そして、「店の代表者を呼んでこい」となりました。

息子さんは、穏やかな雰囲気で、なだめるでも、謝るでもなく、なんとなくまとめるような感じです。結局、その二人が先に会計をすませ、私たちは後から会計をすると、お店の人たちから、丁重にお詫びのご挨拶をいただきました。

その後、近くのスーパーマーケットで買い物をしていたら、車椅子の老人と付き添いの男性がいました。その男性から、先ほどは、お騒がせしましたたと、頭を下げられました。その言葉遣いや、仕草や、色々な印象から、とても落ち着いた物腰が身についている方だと感じました。もちろん、車椅子には、温厚そうな老人がいるだけです。

私はその後、もう既にそれぞれお連れ合いを亡くされているのかな、そして、こうして息子さんが親孝行で、ああして時々、二人で外食をしているのかな、それとも……、などと色々と考えを巡らせたりしました。

●不満とはけ口の関係

『中高年がキレる理由』（榎本博明著、平凡社新書、2016年）によれば、

> 「心理学の世界で有名な理論に「欲求不満―攻撃仮説」というものがある。欲求不満が高じると攻撃的になるというものだ。ちょっとしたことで怒り出す人。他人の何気ない言葉に、勝手に悪意を感じて、攻撃的な態度を示す人。仕事でも何でも、うまくいった人に対して、嫌みったらしいことを言う人。仕事などでミスをした人を必要以上にこき下ろす人。そのような攻撃的な人は、思い通りにならないことが多く、欲求不満を溜め込んでいると考えられる。」（37～38ページ）

といいます。

すると、先の中高年、あるいは老年の人も、何か原因は分からないけれども、思い通りにならないことが多く、それがストレスになって、欲求不満から攻撃的な傾向が現れたのでしょうか。

しかし、思い通りにならないことが多いのは、中高年とは限らないでしょう。若くとも、また、いくつになっても思い通りにならないことはあるでしょう。

昔は、キレる若者、キレる17歳という言葉が使われ、2000年前後に、いくつか続いた凶行を起こした少年たちを呼んだことがありました。

●琴の糸は?

釈尊の弟子に、ソーナという、裕福な家の出身で、性格も聡明でくったくのない青年がいました。出家をした後も、精進努力を怠らない人でしたが、「さとり」をひらけず、憂い、苦悩を増すばかりで、やせ衰えてしまいます。釈尊は、ソーナの家を訪ねた時に、彼が琴の名手であることを思い出し、彼に問いました。

> 「そうだ、ソーナよ、なんじは家にあったころ、たいそう琴を弾くことが上手であったと聞いているが、そうであるか」
> 「はい、いささか琴を弾ずることを心得ておりました」
> 「では、よく知っているだろうが、ソーナよ、琴を奏でるには、あまり弦をつよく締め過ぎてはいけないだろう」
> 「大徳よ、その通りでございます」
> 「だからといって、ソーナよ、弦がゆる過ぎてもいけないだろう」
> 「大徳よ、仰せの通りでございます」
> 「では、どうすればよいか」
> 「大徳よ、それには、あまり強からず、弱からず、ほどよく弦を締めることが大事でございます」
> 「ソーナよ、その通りである。そしてわたしの説くこの道の修行もまた、まさにそれとおなじであると承知するがよい。刻苦にすぎると、心がたかぶって静かなることをえない。だからといって、弛緩にすぎるとまた懈怠におもむくであろう。ソーナよ、ここでもまた、なんじはその中をとらねばならない」

これがきっかけとなり、ソーナは見事に彼の目的を達成したのでした。（増谷文雄著「ブッダ・ゴータマの弟子たち」現代教養文庫、1997年、32～33頁から抄出）

ストレスは、現代の病名ですが、もともと、工業製品を作るときに生まれる歪み、緊張のことで、転じて、人間の精神的な歪みを指して日常語にもなりました。

釈尊は、琴の糸が締めすぎても、またゆるめ過ぎても、適当な音がでないことと重ねて、人間の人格主体の確立の道、すなわち、仏道の歩みを喩えにして、それを偏らない中道として伝えていかれました。

仏道は、知識と異なり、実践を通して身体的に肯いていくというプロセスなしに成立はしません。誰にも溜まるストレスを、適度にする道、中道は、私のキレル姿を、気づかせ、教えることによって、そこに道理に叶った歩みを導きます。

私は、還暦を目の前にした中高年で、確かに今でも何か、都合の悪いこと、気に障ることがあるとカッとなります。まさに、キレル中高年なのですが、私の場合、キレた時には、念仏が出ます。ナンマンダブツ、ナンマンダブツと称える念仏は、そのまま、如来の気づけよ、目覚めよ、身の程知れよという呼び声となり響いているとはこのことでした。

「『生命』や『身体』に関するものは、すべてプロセスを省略することはできない。」と『仕事ができる人はなぜ筋トレをするのか』（山本ケイイチ著、幻冬舎新書、2008年）にありました。仏教の教えは、プロセス、実践行、生活習慣の行とすることがとても大切だと思います。

合掌
万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

忘れること覚えていること
～仏の顔も三度

●「4月8日」を覚えてますか?

テレビ朝日の人気番組『タモリ倶楽部』は、「お釈迦さまおめでとう～日本人ならクリスマスより花まつりを祝おう」という題で放送をしました（2015年4月4日〔3日深夜〕）。番組では、渋谷で48人の若者に「4月8日は何の日?」と尋ねたところ、その認知度は、0%だと報じていました。

これは、忘れたのではなく、「お釈迦様のお誕生日」を知らないということですね。

ところで、2015年4月8日の都心はどんな天気か覚えていますか。時ならぬ降雪となり、開花した桜に積もる雪が大きく報道されていました。同じ4月の28日、都心は夏日となり、関東各地では真夏日になるほど気温が上がりました。

ひと月の間に、降雪と夏日が巡ってくるのは、大変印象的な出来事なので、そのあと数日、この話題で語り合ったにもかかわらず、「人の噂も七十五日」、いやひと月も経つと忘れてしまうのが、私でした。

その時、その日のあり方まで左右する大きな出来事が起きても、人間の記憶は意外と散慢で、あっという間に忘れてしまうのでしょうか。それとも、これは日本列島に住んでいる人びとの特性なんでしょうか。

雪も豪雪となれば大きな被害が出るように、雨も豪雨で災害になります。しかし、日本には「水に流す」ということわざがあります。四季の気候が明確に変わる日本列島は、季節の変化を愛でることができる一方、自然災害も頻発します。そのため、水害で生まれた悲しみ、辛さをいつまでも引きずるのでなく、新しく生活を立て直そうという意識が、「水に流す」という感覚を生んだのかもしれません。

忘れることは悲しみを和らげ、新たな生き方を生み出すものでしょうが、西洋文化のように、自然は征服するものという意識は生まれず、今までの体験が将来に生かされないという側面もあります。日本では、自然災害だけでなく、人災である、戦争による被害や侮辱、原発事故による被害や格差などにも言えることではないかと考えました。

●線香花火の記憶

NHK総合テレビの人気番組「サラメシ」で、福岡県の線香花火の職人さんが1年ほど前に紹介されました。「サラメシ」という番組自体は、「働く人のランチ」、つまり、サラリーマンのメシ（ごはん）を主役として紹介するものです。しかしながら、実際には、その人の仕事、職場、人間関係、さらにはそれらを通しての人間観や人生論までが透けてくるようで、私にとって、見終わるとなんともいえない「ホーっ」とした気分になる番組です。

花火職人の筒井良太さんは、現在、日本で三社しかない国産線香花火の製造所、筒井時正玩具花火製造所を経営しています。同製造所のウェブサイト
http://tsutsuitokimasa.jp
によれば、線香花火の火薬には、30年以上寝かせた松の切り株をいぶした宮崎産の松煙（しょうえん）という煤（すす）、福岡県八女市の手すきの和紙が使われ、さらにその和紙を草木染めで染色して、専門の職人の手によって一本一本丁寧に縒（よ）り上げられています。また、考えてみれば花火ですから、火薬が原材料の一つとして使われています。

番組では、筒井さんご夫妻が、次のように線香花火の魅力を語っていました。

> 他の花火を点火する時、危ないから遠くに離れますが、線香花火は、風を遮るため、そして、その花火の瞬きを見つめるため、人と人の距離が近づくのだと言うのです。それを聞きながら、爆発力の大きな打ち上げ花火は派手な印象が残りますが、不思議なことに、点火した時の風の流れ、昼の暑さを肌に残した人いきれ、周りですだく虫の声、じっと見つめる瞳の中に映る線香花火は、心に温かく優しい印象を残してくれるのだと思いました。

時には何かを破壊するほどの威力のある強い花火は外に向けて爆発し大きな火花を出しますが、か弱い線香花火は人の内側に向かってしっかりとした思い出を残しているように思いました。同じ、火薬を使った花火でも、その因縁の作り方によって、それが人の記憶に与える内容は随分違うのではないでしょうか。

●仏の顔も三度?

お釈迦様は北インドの釈迦国の王子でした。当時、インドは、マガダ国とコーサラ国が勢力を争っていましたが、弱小の釈迦国は両国に挟まれ、つねに侵略の危機にありました。釈尊が出家したあと、コーサラ国の毘瑠璃王は大軍を連れて釈迦国に責め滅ぼそうとしましたが、その時、釈尊は三度にわたって、軍隊の通る街道の枯れ木の下に端座していました。王は、何故、茂った葉の木でなく、枯れた木の下に坐るのかと尋ねると、「王よ、親族の陰は涼しい」という深い意味をこめて釈尊が返答をしたので、王は釈迦国を攻めるのを止めましたが、四度目は止めなかったと小部経典『譬喩（ひゆ）経』に伝わります。

ここから、「仏の顔も三度」ということわざが生まれました。史実では、三度まで猛る心を留めたけれど、四度目は止めることなく釈迦国の一族を滅ぼしたのは毘瑠璃（びるり）王です。しかし、現行のことわざの解釈は、仏（お釈迦）様のような温厚な方でも、非礼を許してくれるのは三度目までだという受け止めに全く変わっています。

実は、この話には深い因縁があります。毘瑠璃王の父王が若き日、釈迦族から妃を迎えたいと考え使者を送ります。しかし、断れば武力にもの言わせ攻めてくるだろうコーサラ国に王女を嫁がせるのを快く思わなかった釈迦族の王族は、身分の低い女に生ませた娘の出生の秘密を隠して王女として嫁がせたのです。やがてコーサラ国王との間に王子が生まれ、その子が八歳の時、弓を学ぶため釈迦国に留学しますが、そこで自分は身分の低い娘が産んだ子であることから差別を受け、はじめて出生の秘密を知るわけです。王子は、自分が王になった時に釈迦国を滅ぼすことを誓い、父の死後、王位を継ぐと釈迦国に出兵しました。しかし、インドの故事の「遠征の時、僧にあったら兵を退けよ」に従い、釈尊に会うことで三度まで兵を退けました。一方、釈尊もこのような釈迦国のかかえる因縁をさとって四度目は、坐ることを止めたため、軍によって故郷の人びとは虐殺されました。さらに後日談があり、毘瑠璃王は兵たちと共に、七日後、川に遊行していたところで暴風雨に遭って命を落とし、宮殿は落雷のために炎上焼失したのでした。

歴史の事実を知ること、すなわち、暴力で妃を取ろうとしたこと、出生を偽って嫁がせたこと、しかも人を差別することを認めたこと、さらに怨みに怨みで報いたことで王自身も命を落としたこと、これらは、因縁によって物事は起こるということを教えるものです。

記憶は忘れることで癒しは生まれますが、道理の法則、因果の教えを身につけるところに、忘れてはならない歴史を受け止め直す「智慧ある生き方」が恵まれます。戦後70年の談話をどのように受け止めるのかということも、仏教の智慧と別のことではありません。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

因果の関係性
～袖触れ合うも多生の縁

●出遇いと別れ～すべてご縁

雪山隆弘さん（1940～90年）は、浄土真宗のご住職でしたが、若い頃、新聞記者として東京で暮らしていました。雪山さんの著書『お茶の間説法』（百華苑、1983年）に、同じアパートに暮らしていた記者仲間のKさんが、マンションに引っ越したときの逸話が紹介されています。

引っ越し蕎麦替わりに手土産を持って、お隣さんにご挨拶に行ったKさんの奥さんが、ドアフォンを押し、引っ越してきた旨を伝えると、ドア越しにその部屋の女性が、「そんなの関係ありませんわよ。お宅はお宅、うちはうちですから、あいさつなんて」と言うので、「そんなことおっしゃらずに、袖触れ合うも多生の縁とかで」というと、「いいえ、関係ありません」と言われシャットアウト、ガックリときたといいます。関西の旧家に育ったこの奥さん、「東京って、こんなに冷たいところだったのかしら」と頭を抱え込み、塞ぎ込んでしまったというのです（同書、55頁より）。

私の最近の体験ですが、長いお付き合いのあった、大変熱心な仏教者のご老人が亡くなられました。私の拙い話を毎月、時には、毎週のように聞法をされた方でした。ご本人から、ご連絡がなく案じていましたが、その逝去を聞いたのは、一か月過ぎてからで、葬儀もご家族のみで済まされていました。生前、自分はそろそろ亡くなるが、葬儀には来て欲しいという旨を告げられ、お約束もしていただけに、大変複雑な気持ちになりました。

「これ有る故に彼有り、これ起る故に彼起こり
これ無き故に彼無く、これ滅する故に彼滅す」（『雑阿含経』）

お釈迦様が35歳、菩提樹の下でさとられた内容です。それは、あらゆるものごとは、関わり合って生じていることで、これを縁起の教えと示されます。私がいるのは、あの人のお陰であり、私がいることと、あの人のあり方は無関係ではないということです。一人ひとりは、個別の存在でありながら、それは必ず、空間的にも時間的にも因果関係の中で成り立っているということです。これは人間観や社会観にも関わりますね。原因があり結果となるのは、思想や信条ではなく道理です。出遇いが生まれたのも、因縁によるものであり、巡り合わせがなかったのも、因縁です。だからこそ、その出遇い、巡り合わせの歴史を深く大切に見つめ直そう、という生き方がお釈迦様の教えです。

●「ポツダム宣言」知らなかったのか?

2015年5月20日の国会党首討論で、野党党首の志位和夫氏が、1945年に米・英・中が日本に降伏を勧告した「ポツダム宣言」を受諾したことを基に、首相に「先の戦争は間違っていたと認めますか」と質問すると、首相は、「読んでいない」と答えました。

翌21日、記者会見で志位氏は、「事実誤認がある。本当に読んでいなかったことがうかがえる」と皮肉をいいました。なぜなら、首相が幹事長代理だった頃、「Voice」2005年7月号で、「ポツダム宣言というのは、米国が原子爆弾を二発も落として日本に大変な惨状を与えた後、『どうだ』とばかり（に）たたきつけたものだ」と語っていたことを指摘し、本当は、1945年7月26日に米英中の名で発表され、原爆投下後、日本が8月14日に受諾を決定した事実を基に、志位氏は「原爆が落ちた後に『たたきつけられた』ものではない。事実誤認がある」と述べたのです。

志位氏が「日本の戦争について世界征服のための戦争であったと明瞭に判定している。総理はこのポツダム宣言の認識を認めないのか」と質問したのに首相は直接答えず、「その部分をつまびらかに読んでいないので、直ちに論評することは差し控えたい。先の大戦の痛切な反省によって今日の歩みがある」と述べました。首相本人が「戦後レジームからの脱却」と言ってきた戦後の日本を決定づけた「ポツダム宣言」を、きちんと読んだことがないことを印象付けることになったわけです。（以上、朝日新聞デジタル2015年5月22日付参照）戦争を見つめず「平和法案」と主張するのは、因果の道理の立場と違うようです。

●平和と共存に貢献する仏教

かつて政治は一部の権力者が、多くの場合、宗教の権威や人心をまとめる機能を利用して社会を支配してきましたが、現在、政治を支配し、暴走しないようにする主権者は、国民です。一方、社会の発展で、宗教と政治の両者も、緊張をもちながら、向き合うという関係が生まれています。この関係が宗教と政治の本来の理想的なあり方だという見方が、近現代の市民社会としてフランスやアメリカなどに生まれ、日本の戦後も、憲法によって政教分離が打ち立てられました。この関係でこそ、個人の「信教の自由」が保障され、それを支える「政教分離原則」が確立され、両者は、本来の意義を全うできるわけです。

しかし、政治と宗教は、異なる立場、目的、性格をもちながらも、両者は人間の営み、文化ですから、それぞれの限界を意識しながら、本来の役割を充分に分担し、緊張関係をたもちつつ、お互いに批判し合いながら、社会に貢献して、人間個人の幸福と社会の平和と福利向上のために、互いに自己発展を遂げていくべきです。言い換えれば、宗教は、つねに政治を厳しく批判し、相対化しながら、また、政治は、宗教を充分に尊重し、政教分離の原則を保ちながら、ともにお互いを不可欠なものとして認めあい、関わるべきです。

とくに宗教は、個人や社会に対して責任を負うものだからこそ、政治の現実に対しては、本来の政治のありようを念じて、絶えざる影響を与え続けるべきです。具体的には、信教の自由や、政教分離の原則を踏みにじるような政治の諸状況を厳しく見据えることです。

真宗大谷派は、2015年5月21日、「安全保障関連法案に対する宗派声明発表」をし、「私たちの教団は、先の大戦において国家体制に追従し、戦争に積極的に協力して、多くの人々を死地に送り出した歴史をもっています。」といい、同年6月10日、「非戦決議2015」を宗会で可決し、「私たちは過去において、大日本帝国の名の下に、世界の人々、とりわけアジア諸国の人たちに、言語に絶する惨禍をもたらし、佛法の名を借りて、将来ある青年たちを死地に赴かしめ、言いしれぬ苦難を強いたことを、深く懺悔するものであります。」と記しています。いま、戦争法案と言ってはいけない、平和支援法案が、与党により強引に進められています。憲法違反かどうか判断するのは「憲法の番人」である最高裁判所だそうですが、その番人の主人は、国民一人ひとりだというのも、因果の中にありますね。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

同事という慈悲
～うるおいあるいのちを育てたい

●「お～、いたい、いたい」

「ほとけさま」という言葉の響きは、やさしくて、あったかくて、いつくしみふかい、そんなお方というイメージがあります。

そういうイメージは、どこから来るのかとたずねてみると、「ほとけさま」の開かれたおさとりにあるようです。

確かに、「さとり」は、智慧（ちえ）とも呼ばれるように、今まで見えなかった迷いや自己中心の煩悩を気づかせて、照らしだし、まことに進むべき方向を示す、きびしさ、するどさ、明晰さがあります。それで、「さとり」の智慧の側面は、光として象徴されて、お仏壇や、ご本堂のお飾りには、おロウソクにお灯りが灯されます。

一方、「さとり」は、慈悲とも呼ばれるように、邪見や驕慢（きょうまん）の心にとどまってしまい、居直ったり、思い上がる私を包み込み、まことのいのちに育てる、優しさ、潤いがあります。それで、「さとり」の慈悲の側面は、私たちをまことのいのちにまで育て上げる生命として象徴されて、仏前にお花がお供えされます。

ところで仏教では、その慈悲が、もっとも具体的な深い行動となった姿を、同事といいます。これは、相手と同じいのち、相手と同じ立場になって、事に向き合っている姿といったらよいかと思います。

こんな話を聞いたことがあります。子どもを病院に連れて行き、お医者様が注射器で我が子の腕に針を刺そうとした、その瞬間、大きな声で、「お～、いたい!!」と、思わず叫んだのは、その子のお母さんだったというのです。自分が痛いのではないのに、子どもの痛みが、自分の痛みとして感じられるのですね。同事ともいわれる、深い慈悲の温かさは、懐かしいような、やるせないような気持ちが湧いてきませんか。

●筑紫哲也という生き方

佐高信（さたかまこと）著『不敵のジャーナリスト　筑紫哲也の流儀と思想』（集英社新書、2014年）によれば、筑紫哲也が亡くなり、その「不在」を残念に思っている人がいる一方で、安心している人がいるとして、安倍晋三があげられています。筑紫が、生前から、安倍から標的、あるいは憎悪の対象とされた話が紹介されています。

TBSテレビの『筑紫哲也　NEWS23』で、ポスト小泉の自民党総裁選挙の討論番組で、筑紫が、「自民党の改憲案を読んで失望すると同時に安心もした。こんなものが理想になるはずがないと思ったから」というと、安倍が、「筑紫さんが失望したというのはよい改正案である証拠だ」と返して言ったという逸話が紹介されていました。

朝日ジャーナル編集長時代から、私は強く筑紫に惹かれてきましたが、この本を読むと、そのジャーナリスト人生は、次の「三本の軸」で貫かれていたといいます。

「少数派の立場に立ち続けた」こと。
「沖縄への思い入れを持ち続けた」こと。
「護憲の立場を崩さなかった」こと。

その「少数派の立場に立ち続けた」拠り所を、筑紫は自著『旅の途中　巡り合った人々』（朝日新聞出版、2005年）で、沖縄タイムスの創立者の一人、豊平良顯（とよひらりょうけん）の次の言葉を引用しているところに伺い知ることができます。

「一方に圧倒的な権力を持つ統治者がいて、他方に基本的な権利を奪われている被統治者がいる。その双方の言い分を平等に並べて伝えることのどこが公正なのか。圧倒的に弱い側の立場に新聞が立つことが、この不均衡を少しでも改めることに役立てば、それが公正というものではないか」

●沖縄の海～ともに潤う

2015年4月、沖縄本島に行きました。夏には何回か訪れたことがありますが、春は初めてでした。出発した東京は、桜の満開の頃でしたが、沖縄は半袖でなければ過ごせない温かさでした。それもそのはず、その日、沖縄本島北部の恩納村では海開きの日でした。

この季節を沖縄では「うりずん」といい、語源的には「潤い初め」で、「うるじん」とも呼ばれます。梅雨前、日射しは増し、植物が潤い、花々が咲き誇る季節です。

しかし、沖縄で一番の話題は、辺野古基地移転です。沖縄県民だけでなく、全国民が、毎日繰り返される海上埋め立て工事阻止の運動を見つめています。地元報道で、海上保安庁による、抗議行動する船の転覆、カメラを力ずくで奪う、海に落とされ沈められる、船上の暴力で女性が怪我救急搬送、名護市議の視察船に定員オーバーで乗込み船長の胸ぐらを掴（つか）み上げる、陸上で海上保安官が五人がかりで初老の男性を羽交（はが）い締（じ）め馬乗り、保安官には『お前の顔を覚えているからな』と威嚇する人がいるなど、考えさせられました。

人びとが選んだ議員と政府によって、痛めつけられ、ないがしろにされる人びと、また、暴力暴言をふるう人たち、双方に悲しみが生まれる処に私たちの税金が使われています。

「余の人を強縁として念仏ひろめよと申すこと、ゆめゆめ申したること候はず」と、親鸞聖人は手紙に、念仏を弘めるため「余の人」、つまり、権力者の手を借りることは決してあってはならないといいます。既得権益を守るため、体制秩序の維持につとめる彼らの本質は、仏教の真理に暗い存在だと聖人は捉えて、「そらごとを申し、ひがごとを、ことにふれて、念仏のひとびとに仰せられつけて、念仏をとどめんとするところの領家・地頭・名主の御はからひどもの候ふらんこと、よくよくやうあるべきことなり。そのゆゑは、釈迦如来のみことには、念仏するひとをそしるものをば名無眼人と説き、名無耳人と仰せおかれたることに候ふ。」（意訳:ありもしない作り事を言い、間違ったことを、ことにふれて、念仏する人々に言いつけて、〈それを口実に〉念仏を禁止しようとする、荘園所有者や幕府の役人、名主たちが企てることは、十分に理由があることです。その訳は、釈迦如来の御言葉に、念仏を謗るものを、〈心の〉眼の無い人と名づけると説き、〈心の〉耳の無い人と名づけるとかねて仰せになっておられます。）といいます。

しかし、「非業たる世のひとびとをいのり、弥陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはば、仏の御恩を報じまゐらせたまふになり候ふべし。」（意訳:間違った世間の人びとを祈り、阿弥陀仏の御誓いの本願を信じるようにと、お互いにお考えになれば、仏のご恩に報いることになるのです。）と示し、弾圧した人びとが仏法に遇うようにいのれと教えます。

慈悲は、悲しみの心と共に生まれ、怨親平等の同事の心として深め育てられます。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

全体と部分
～「いのち」を尊ぶ

●「デルス・ウザーラ」

1902年、ソ連政府の官吏であるロシア人探検家ウラディミール・アルセーニエフ（1872～1930）は、当時、まだまだ人跡未踏の地であるシベリア沿海地方を探検調査していました。

森林（タイガ）と呼ばれる地域で、自然の知恵を身につけている先住民（ゴリド人）の猟師に出遇います。アジア系の顔つきのその男の名前は、デルス・ウザーラでした。それ以降、アルセーニエフをカピタン（キャプテン）と呼ぶデルスを案内役にして、苛酷な地域の探検を進めることができるようになるのです。

一九七五年に公開された黒澤明監督によるソ連・日本の合作映画を私は高校3年の時に観て以来、40年ぶりにCS放送で観る機会に巡り合いました。この作品は、アルセーニエフという、近代社会の人間で、上級公務員の視点が重要な意味を持つのです。

しかも、映画を観ている私たちも実は同じように、人や自然や社会を分析して、管理し、支配しようとする思考方法を身につけてしまっていますから、カピタンと同じように自分の立っているところに気づかぬまま、自然の知恵を身につけているデルスの純情さに深く感銘を受けるままに、象徴的なことを伝える映画の最後を迎えます。

厳しい自然を熟知し、しかもそれを征服するのでなく、深い生き方で尊重するデルスは、様々な困難を乗り越え、或は猛吹雪の中でカピタンの生命を救います。やがて年老いて、視力が衰え、すぐれた猟銃の名手も狙いを外すようになりました。カピタンは、デルスを招き、街の住宅で一緒に暮らすものの、どうしても管理された空間での生活のできないデルスは山に帰ります。その時、最新式の照準器のついた高価なライフルをカピタンは、老化したデルスのために、よかれと思ってプレゼントします。数ヶ月後、デルスの他殺死体が発見され、埋葬の地にたった一人訪れたカピタンは、ライフルを奪おうとした者によってデルスが殺されたことを知り、ノンフィクションの作品を基にした映画は終わります。

●部分知～近代的な科学の知性

一概に言い切れないにしても、西洋的な科学の知性と、東洋的な仏教の叡知という分類をすると、この映画を通して何かを明らかに捉えることができると思います。

龍谷大学名誉教授、故信楽峻麿（しがらきたかまろ）先生（1926～2014）から、私はこの問題を次のように学びました。科学的な知性とは、西洋文化に基盤をもつもので、それは、人間中心の人間観に基づきますが、自己中心的なものの見方を、徹底的に排除することによって、出来るだけ客観的にものを見ようとして成り立ってきたものです（『教行証文類　第九巻　化身土巻　Ⅱ』2006年　法藏館　68頁より）。

すなわち、科学の知性では、見る主観と見られる客観とを、はっきりと分けて、主観を徹底的に排除する方向で知性を成り立たせ、それで客観を本当に純粋に、それだけをえぐり出してとらえるというものの見方をするわけです。

そういうことから、この科学的知性とは、どこまでも部分知ということになります。

つまり、どれほど精密な知識でも、世界のすべてのことを見届けるものではありません。科学はとても大きな可能性がある一方で、科学の技術の抱えるものには、人類に貢献する明るい部分と、人類に悪弊をもたらす暗い部分があるのは周知の通りです。

1986年のチェルノブイリ、2011年のフクシマの原発事故は、いまも多くの被害をもたらしています（日本政府は原発廃止の方向を示したが、政府が替わり、2015年8月、原発なしの期間が終わり再稼働）。また、薬の副作用、農薬の影響被害なども深刻な問題です（特に日本は、農薬規制が世界レベルの中で低い）。

ということは、科学的知性とその技術には限界があり、絶対の信頼をよせることはできないということを知るべきです。つまり、科学的な知性は、全体ではなく、ものを分けて、その部分を解明するだけのものです。

『西遊記』に、孫悟空が觔斗雲に乗って世界の果てまで駆け巡ったけれど、実はお釈迦さまの手のひらの中でしかなかった、という寓話は、とても深い視点から、人間の知性を物語ったものだと改めて知らされます。

駆け巡るだけなら罪もありませんが、部分だけを知ることで、よかれと思ってしたことが、デルスに致命傷を与えたように、私や社会、そしてこの世界に致命傷を与えていないか、どうしたら部分知の陥穽に気づくことができるのでしょう。

●全体知～すべての「いのち」を見る仏教の叡知

人間の科学的な知性は、全体の中の一部分における知で、それを部分知というのに対して、仏教的な智慧を全体知ということができます。このような仏教の持つ世間を超えた出世間的で、全体的な叡智からみるならば、人間的な知性は、宇宙技術のような高度なものでも、社会科学の思想イデオロギーでも、それらは「よろづのこと、みなもてそらごとたわごと、まことあることなき」（『歎異抄』「後序」）と、すべてが世俗の中の、煩悩の営み、「まよい」の中の営みということになります。そして、そのように人間の営みすべてを相対化する視点を持ち、教えるのが仏教の叡智です。

それは、見る自分と見られる相手、自然を別々に分けるのではなくて、見る自分の中に見られる相手のいのちのかけがえなさを見届け、見られる相手の中にも見ている自分のいのちのかけがえのなさを見届けるような見方です。映画では、デルスは、大地にも、川の水にも、焚き火の炎にも、「にんげんのいのち」を見届けていました。

幕末から明治にかけて、京都嵐山の臨済宗の天龍寺に滴水（1821～1899）という僧侶がいました。彼は京都府綾部市の出身で、青年の頃、岡山の曹源寺の儀山という僧について学びます。夏の夕方、師匠の行水を手伝い、手桶の底に残っていたわずかな水を、何気なく地面に捨てたとき、師匠に厳しく一喝されて、「水は仏の御命である。一滴の水を粗末にするな。お前には、水の生命が見えないのか。その水をあたりの草葉にかけてやれば、どれだけ草葉がよろこぶことか。またどれだけ水の生命を生かすことができるか」と教えられたといいます。これが心底に徹して修行に励み、ついに五十歳で、天龍寺の管長につきます。以後、号を「滴水」と改め、78歳の生涯を閉じるまで、「水は仏の御命である。一滴の水をも粗末にせぬように」と言い続け教化に尽くしました。

滴水という名前は、一滴の水の生命の尊さを知ったことに由来します。このような仏教のものの見方は、科学的な立場では、見過ごされ、あるいは嘲笑されました。

しかし、これからの私たちの日常的な生活では、科学的な視点は充分に認めるながらも、このような生命を尊ぶ視点も、充分に大切にし、忘れないようにしたいと思います。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

自分と向き合う、社会と向き合う

●不安と恐れ

現代社会には、様々な苦しみや悩みがありますが、それは不安や恐れとして実感されるように思います。

不安や恐れという感情は、どちらも自分にとってなくしたいことですが、両者はその方向性が違うように思います。

先ず、不安だと感じるときは、よく考えてみると、その時の苦しみや悩みは、何が原因で生まれているのかはっきりとしていないものです。「先行き不安」というように原因の分からないことによって、心が落ち着かなくなることなので不安と感じるのです。

それに対して、恐れを感じるということは、多くの場合、その原因になるものが、ある程度、はっきりとしています。それは、必要だった何かが無くなってしまったり、逆に不必要なものが増えることで、恐れが生まれているのです。

そうすると、不安というものは、苦しみや悩みを作り上げている原因として、自分自身の心、つまり、私の内面のあり方が大きく関わっているということにならないでしょうか。

そして、恐れというものは、その原因として、自分自身をとりまく状況、社会のさまざまなあり方が影響を与えているということになるように思います。

少し精密さを欠く分類ですが、私たちの苦しみや悩みは、内面的な心の世界が要因となって起こるものとしての不安、そして、外面的な社会の問題が要因となって起こるものとしての恐れというように整理できるように考えました。

●救われるとは

仏教は、私たちが苦しみ悩みを超えて、確かないのちを生きていくことを教えます。そのために、一人ひとりが救われる実践行を勧めます。

いま、内面のあり方を問いにした仏教の言葉と、社会のあり方に目を向けた仏教者の逸話をそれぞれ、ご紹介しましょう。

先ず、本願寺八代宗主の蓮如上人は、戦乱と飢饉と一揆の続く世に生きる門徒に向かって、「往生は一人一人のしのぎなり」といいました。仏教の本質的なあり方は、私たち一人ひとりが、人間の本当の問題を「しのぐ」ことが出来るようになるものだとして受けとめる姿勢です。つまり、仏教は、一人ひとりの問題解決になるという訳ですから、他のだれでもない自分自身の内面のあり方が「往生」、つまり、救われるかどうかを左右する重要な問題だというのです。仏教は、個人の内面の問題であり、それを解決する実践にこそ、仏教の本質的なあり方があるのだという教えです。

また一方で、道元禅師の『正法眼蔵随聞記(しょうぼうげんぞうずいもんき)』に、建仁寺を開いた栄西禅師の次のような逸話が説かれています。飢饉で飢えた親子が建仁寺に乞食にきますが、寺にも与える食物がないので、栄西は、仏像の光背を作るための銅を与えます。すると、寺内の弟子たちは師匠を非難しますが、「仏は飢えた虎の親子に対して、自分の身も骨も血も全部与えたではない」と、釈尊の前世物語の「捨身飼虎(しゃしんしこ)」の話をします。そこで栄西は、仏の心なら、飢えている人々のために、たとえわが手をちぎり、足を砕いてでも、自分を投げうち助けるだろう、私は今、その仏の心を実践しただけだといいます。仏教における、深い慈悲の心が、社会の苦しみ悩む人々を救うということにこそ、仏教の本質的なあり方があるのだということをよく物語る、心を深く打つ事例です。

●個人の成熟と社会の成熟

仏教は、教えを学び、実践行を繰り返すことで、人間が古い殻を脱いで、新しく仏という人格に成っていくこと、育っていくこと、そして、それによって、社会もまた、新しくあるべき理想に向かって変化することを究極の目標とします。

教えを学び、実践することで、古いものの見え方が捨てられて、新しいものの見え方が生まれることであり、人間の人格が変化し成熟することをいうわけです。すると、成熟こそが教えを学んだことの本当の証だということになります。つまり、何も変わらない、何も育たないならば、仏教を学び、歩んだとは言えないことになります。宮城教育大学元学長の林竹二先生のいう、「学ぶことは変わること」という言葉に重なります。

仏教を生きて、人間が内面的に変わることは、外面的な社会が変わることと、どう関係するのかということをいま、個人の内面と社会的側面として考えたいと思います。

今までの仏教理解には、個人の成熟と社会の成熟は別のもので、仏教の「さとり」とか信心は、どこまでも個人の内面的な心の問題であり、社会には関わりを持たないものだと言う主張がありました。これは、確かに他者に代わって貰うことのできない内面の問題として疑いようのない事実です。仏教が、心の宗教といわれるゆえんです。

しかし、「さとり」や信心は、人間の営みであるならば必ず、社会との関わりを持つという主張もあります。お釈迦様が「さとり」を開かれて、しばらく心の内面で楽しまれたけれども、四十九日を経て、初めて説法を転じられたことと重なるように、仏教の本質的なあり方は、必ず社会性を持つという考え方です。これも否定することのできない社会的な側面の問題です。仏教は、慈悲の宗教ともいわれるものです。

そうすると、「さとり」や信心は、先ず個人の心の中で、一人ひとりが深く実感することがなくてはなりませんが、その「さとり」や信心は、社会の問題と向き合って、少しでも問題解決のために自分が進んで何かをすることも、仏教者としての姿といえます。

しかし、蓮如や栄西は、社会の底辺に生きる人々が先ず、飢餓に苦しむような社会のシステムを問いにしたり、その政治のあり方について問いにすることはありませんでした。

少し角度を変えて見てみるならば、仏教の歴史は、奈良時代から近代の各仏教教団の営みの多くは、時代の体制や、政治権力に迎合したり、あるいは積極的に重層したり癒着してきました。そこには、民衆を苦しめる封建制度を問いにしたり、戦争を問いにする仏教者の視点は殆ど生まれなかったように思います。むしろ、体制権力の抱える問題を支えてゆく、保守的な役割を演じることで仏教は、その一面を展開してきたことになります。

日本では、多くの民意に背いて、原発は再稼働、安保法案は憲法違反のまま可決されました。不安や絶望に直面することのある人生を、深く内面に向かって問いにし、同時に、体制権力に癒着する役割を演じている自身のあり方をどこまでも外に向かって問いにしていくことが要なのに、なかなか出来ない自分を悲しむべきだと思います。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。

手を合わせ、お礼をする
～合掌礼拝

●「敷居を高くする」

「不義理なことや不面目なことを重ねてばかりいるので、その人の家へ行って会うことが出来ない気持ちになる。」（三省堂『新明解国語辞典第五版』）

この言葉は、その家に行きにくくなってしまう当人の心のありようを言ったものです。つまり、同じ敷居なのに、まるで「敷居が高く」感じてしまうことから、「敷居を高くする」というのが本来の意味であり、使い方だそうです。

ところが、2011年4月の文化庁の月報に掲載された「国語に関する世論調査」によれば、「この慣用句の本来の使い方が忘れられつつある」とありました。同調査では、「40代を境に、50代以上では本来の意味である『相手に不義理などをしてしまい、行きにくい』、30代以下では『高級過ぎたり、上品過ぎたりして、入りにくい』を選んだ人が多くなっています。現在は、本来の意味から『不義理や面目の立たないことをしている』という前提となる理由の部分が欠け、その家に入りにくい、という結果だけを残して用いられるように、その使い方が変わってきている状況が分か」ると指摘しています。

文化庁のウェブサイトでは、それ以上の解説はありません。しかし、世代により、使い方の意味内容が変わったのには、大きな原因があると思いました。それは、「前提となる理由の部分が欠け」てしまったことです。つまり、「不義理なことや不面目なことを重ねてばかりいる」という認識や実感そのものが変わってきた、あるいは、そうした価値観が現実生活になくなってきたからではないでしょうか。

別の言い方をすれば、生活感覚として、「義理」を欠いてはならない意識や、「面目」を重視するという相手との関わり方が、現代社会では、振り返ることが少なくなってきたのかもしれません。もちろん、「義理」や「面目」を重視しなければならないというのではありません。時代が変わるとは、人との関わり合いの感覚が変わることなのではないかと思うのです。その背景には、人とのつながりに対するあり方が、今までと変わってきたのでしょうか。

●「親しき仲にも礼儀あり」

随分前に書き留めたもので、どこにある話か不明ですが、相手に対して、お礼をするという関わり方が、自分の心を大転換することになると教えてくれる手紙です。

「校長先生、お変わりありませんか。私はどうしても聞いていただきたいことがありましたので筆をとりました。

先生は、卒業式に卒業証書をくださいます時、『皆さんは、これを家に持って帰り、ご両親の前に置いて、ありがとうございましたと一言お礼が言えなかったなら、この卒業証書は何の値打ちもありません。紙屑です』とおっしゃいました。私は、聞きながら、せっかくの卒業証書を紙屑にしては情けないことであり、一言お礼を言おうと思いました。

しかし、日々の暮らしを振り返ってみると、そんな殊勝なことを一遍も言ったことがありません。また、そんなことを言えば、きっと父は『いつもと違うじゃないか、雨が降るよ』と、ひやかしそうです。どのようにお礼を言おうか考えながら帰りました。母は、『お帰り、卒業おめでとう』と言ってくれましたが、だまって家に入りました。母は心配そうに後からついて来ました。父の部屋に入り座って、卒業証書を置き、さて『ありがとうございました』と言おうと思うのですが、どうも照れくさくて言えません。しかし、先生の言葉に励まされて、下を向いたままではありましたが、とにかく『ありがとうございました』と言ったのです。

そろそろ、『雪が降るぞ』と父のひやかす声が出るころなのに、その日は、なぜか、いくら待っても、ひやかす言葉が出てきません。変だなと思いながら、下からチラッと父の顔を見ました。父の目には涙がいっぱいうかんでおりました。そして、たった一言『ご苦労じゃったね』と言うのです。母の方を見ると、母は堪え切れなくなって、目からポトポト涙をこぼしているのでした。

私は、ハッとしました。この卒業証書は、私が勉強し、私が努力をしてもらったものとばかり思っていましたが、とんでもない大間違いだったのです。これは、本当は父や母がもらわれるべきものでありました。私は、初めて親心に遇った思いでした。現在、親元を離れていますが、いつも父や母の方に向かって手を合わせております。」

●お礼を言うことが私の心を育てる

仏教は、あらゆるものの恩恵によって生かされている「縁起の道理」に背いて、自己中心に生きている自分に気づいていく道を教えてくれます。「受けたご恩は石に刻み、かけた情けは水に流せ」と諺ではいうけれど、仏教に照らされて、私自身を振り返ると「受けたご恩は水に流し、かけた情けは石に刻む」ような生き方をしています。

親鸞聖人（1173～1263）の浄土真宗の熱心な地域では、毎朝夕のお内仏（仏壇）でのお勤めや様々な仏事で、如来様にお参りすることを「お礼をする」という独特の伝統があります。そこに、自分の姿を深く見つめる生き方が教えられるように思います。もし「お参り」しようと大人が声をかけたなら、何も知らない子どもだと、「お参り」を自分の都合をお願いすることだと受けとめ、手を合わせていても間違いとはいえません。

ところが、お念仏を称えるとは、お礼をすることだったという言葉で教えてもらう生活環境があると、私がしてあげているのでなく、大切なことを呼びかけて貰っているという実感が育つように思います。丁度、心が育つと受けとめ方が変わり、生かされている「いのち」、おかげさまの「いのち」だったと転換します。そのように、称えている「称名念仏」が、如来様から呼びかけて貰っている「聞名念仏」とぐるりと展開するのです。

生活習慣として念仏を称えつつ、私の称える念仏は、「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」と我が「いのち」に一緒にいて下さる如来様の喚び声だという実感に、私の心は育てられるように思います。心の敷居を高くしないようにしたいものです。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。